



第4章

岐阜市の歴史



1 岐阜市のあゆみ

岐阜市域が歴史に登場したのは旧石器時代。最初は岐阜市の北部から東部にかけての台地上に、そして、縄文・弥生・古墳時代には、ほぼ全域に先人たちの営みは広がっていた。戦国時代には、不世出の英傑・織田信長が岐阜を天下統一の拠点としたことから、全国にその名が知られることになった。その後、江戸時代には「岐阜町」は尾張徳川領となり、商工の町として発展し、「加納町」は加納藩の城下町として、また、中山道の宿場町、商工の町として発展していった。



岐阜城とまちなみ

古代・中世

市内では、縄文時代の御望遺跡や、梅林・華陽・長良地区などの遺跡に人々の営みが見られる。この辺りの豪族と大和朝廷に関わるようになると、現在でいう古墳が造られていった。

岐阜市では最大の琴塚古墳のほか、長良、長森以北の丘陵部を中心に多くの古墳が見られる。大化の改新を経て、大和朝廷の中央集権体制が確立し、各地に国司を置く地方制度などさまざまな制度が整えられた。住民には、戸籍制度や条里制を設け、公地公民として、労働に従事させた。いわば豪族支配から国の支配の形となったのである。

岐阜市域の条里制は、主に岐阜市の中心部から長良川以南にかけて、以北では福富、三輪、秋沢などに設けられていた。白鳳時代になると各地の豪族たちが寺院を建立するようになる。市内では、厚見寺跡、大宝廃寺、鍵屋廃寺、長良廃寺と現在呼ばれる遺跡である。

奈良時代になると、全国各地に都の大寺社や貴族が所有する荘園ができた。市内では平安時代以降に、茜部荘、平田荘、市橋荘、鶺鴒荘、芥見荘などがあつた。

この頃、美濃に土着した源氏系の氏族が、荘園の現地荘官となり、鎌倉時代にかけて勢力を拡大し、美濃源氏土岐氏の台頭となっていった。土岐氏は、南北朝時代、美濃国の守護となり、拠点を土岐郡から長森、そして革手に移した。土岐氏は一時、美濃のほか尾張、伊勢守護を兼任しており、美濃の中心地の革手には都から貴族や連歌師など文人がたびたび訪れた。以後、土岐氏の時代が続くが、守護代の斎藤氏が活躍し、応仁・文明の頃には斎藤妙椿が勢力を持っていた。のち、船田合戦や城田寺合戦などの内紛が起こり、11代土岐頼芸を追放した斎藤道三が美濃国を手中にし、井口と呼ばれた稲葉山麓に城下町を形成した。

永禄10（1567）年、道三の孫、龍興を追いやり美濃の国を手中にした織田信長は、「井口」を「岐阜」と改め、「楽市・楽座」を行い、城下町を発展させたといわれている。信長が本拠地を岐阜から安土に移した後、岐阜城は嫡男の信忠に与えられ、さらに織田（神戸）信孝、池田元助、池田輝政、豊臣秀勝、そして信長の孫織田秀信が城主となった。慶長5（1600）年、関ヶ原の戦いの前哨戦において、豊臣方の岐阜城は落城した。

近世

関ヶ原の戦いで勝利した徳川家康は岐阜町を直轄地にして、美濃国奉行を置き、美濃一円の幕府領を支配した。元和5（1619）年、尾張藩に美濃国内で領地が増えられたとき岐阜町も尾張藩領となり、元禄8（1695）年には奉行所が置かれた。美濃国の尾張藩領は約13万石で、長良川、木曾川、揖斐川の水運のほか、東美濃の山林、和紙の産地などを押さえており、それが後ろ楯となっていたおかげで岐阜町は長良川の水運の湊町、商人の町として栄えた。関ヶ原の戦いでは、徳川方であった黒野城主加藤貞泰は、4万石の本領を安堵されたが、慶長15（1610）年に米子へ転封され黒野城は廃城となった。

一方、関ヶ原の戦いの直後、家康は豊臣方に対しての戦略の一環として、加納城の築城を命じ、初代藩主に長女・亀姫の婿、奥平信昌を入封させた。奥平氏時代の所領は10万石で、のち加納藩主は、大久保氏5万石、戸田氏7万石、安藤氏6.5万石（のち4万石）、そして永井氏3.2万石と譜代大名が続いた。慶長7（1602）年、徳川氏は前年の東海道につづき、中山道に伝馬制度を設けた。寛永11（1634）年になると、加納宿が定められ、それまでの岐阜町経由から、直接河渡宿に向かうように変更した。

また、永井氏の時代に和傘業が盛んとなり、加納は城下町、宿場町そして和傘の町として繁栄した。農村部では織物も盛んに行われていた。江戸時代、現在の岐阜市地域の支配は、岐阜町が幕府領ののち尾張藩領、加納は加納藩領、他の地域は加納藩領、高富藩領、磐城平藩領、尾張藩領など大名の領地のほか幕府領・旗本領と分割統治されていたのである。

近代

明治4（1871）年に廃藩置県が行われ、その2年後の明治6（1873）年に岐阜の町の郊外の今泉村に岐阜県庁が置かれ、岐阜は「県都」として発展していく。明治22（1889）年、岐阜の町と、今泉村、小熊村、稲束村、富茂登村と上加納村のおおむね北半分地域が合併し、岐阜市が誕生。西野町に市役所が置かれ、初代市長に熊谷孫六郎が選任される。

明治24（1891）年、濃尾大地震によって市街地の約37パーセントを焼失するという被害を受けた。明治44（1911）年には、岐阜県内で二番目の私鉄（一番目は岩村電気軌道）・美濃電気軌道が岐阜市と美濃町（美濃市）を結ぶ路線を開通するなど交通網が年ごとに拡充し、柳ヶ瀬商店街や電車道通りとなった神田町通りなどの商店街が誕生し、発展していった。

明治36（1903）年、岐阜市は上加納村の残り南半分と合併した。その後、大正時代に入ると人口が増加していった。たとえば大正4（1915）年からの4年間で4割以上の増加をみたのである。これに伴い、岐阜市周辺を含んだ地域を対象として商業地、工業地、住宅地といった都市計画が出されるようになった。また、大正8（1919）年には、美江寺町に市役所新庁舎が建設された。

このような背景もあり、昭和6（1931）年には本荘村、日野村、昭和7（1932）年には長良村、昭和9（1934）年には島村、昭和10（1935）年には三里村、鷺山村、昭和15（1940）年には則武村、南長森村、北長森村、木田村、常磐村に加え、一時は南部の村々と合併し市制の構想もあった加納町とも合併を遂げ、市域を拡大していったのである。岐阜駅周辺にいくつもの紡績、製糸工場が見られたのもこの頃であった。



JR 岐阜駅北口駅前広場

昭和20（1945）年7月の空襲で岐阜市街のほとんどが焼失したが、終戦直後には、岐阜駅前に古着の商店ができ、すぐさま繊維問屋街が形成され、東京、大阪に並ぶ既製服の一大産地として発展していった。柳ヶ瀬も焼け残った映画館をいち早く再建するなど復興が目覚ましく、またたく間に全国的に有数の繁華街となった。

昭和30（1955）年には、「長良川鵜飼用具」一式が国の重要有形民俗文化財に指定された。同年、ぎふ金華山ロープウェーが開通し、翌年に岐阜城天守閣が再建されるなど、岐阜市は観光都市としても発展していった。

戦後の大合併では、昭和24（1949）年の岩野田村にはじまり、昭和25（1950）年には市橋村、^{うずら}鶺鴒村、^{あかなべ}茜部村、^{さいごう}西郷村、^{ななさと}七郷村、^{かたがた}方県村、黒野村、岩村を、昭和30（1955）年には^{かがしま}鏡島村、^{あつみ}厚見村を、昭和33（1958）年には^{ひきえ}日置江村、^{あかみ}芥見村を、昭和34（1959）年には^{ごうと}合渡村を、昭和36（1961）年には^{みわ}三輪村を、昭和38（1963）年には^{あじろ}網代村を合併した。さらには昭和44（1969）年、^{もとす}本巣町の伊洞地区を合併した。その間、昭和34（1959）年の伊勢湾台風や翌年の台風では、家屋の倒壊、長良川などの堤防の決壊による浸水、農作物などに甚大な被害を被った。

高度成長期を迎え、住宅需要が高まり^{しゅうらい}松籟団地をはじめ岩田、^{み た ほら}三田洞、^{おおほら}大洞、加野と次々に団地が造成された。昭和41（1966）年には市庁舎を今沢町に建設、移転。また、モータリゼーションの発達によって、昭和43（1968）年の環状線の着工、昭和44（1969）年の名岐バイパスの開通など、道路網が整備されていった。

大きな祭典としては、昭和40（1965）年の「岐阜国体」、昭和63（1988）年の「ぎふ中部未来

博覧会」が挙げられる。

平成8（1996）年、岐阜市は中核市となり、国から新たな権限が委譲され、ますます独自性が発揮できるようになった。同年、JR岐阜駅の高架事業が完成し、駅前付近の再開発事業が始められていった。

平成18（2006）年、人口約12,800人あまりの羽島郡柳津町^{やないづちょう}と合併。

平成23（2011）年2月に金華山一帯が「岐阜城跡」として国史跡に指定された。

平成24（2012）年9月下旬から10月中旬にかけて「ぎふ清流国体・ぎふ清流大会」が開催された。

平成26（2014）年3月、「長良川中流域における岐阜の文化的景観」が国の重要文化的景観に選定された。

平成27（2015）年3月、「長良川の鵜飼漁の技術」が国の重要無形民俗文化財に指定され、同年4月には、“「信長公のおもてなし」が息づく戦国城下町・岐阜”が日本遺産に認定された。

令和3（2021）年には、司町に新しい市庁舎が完成、今沢町から移転し現在に至る。



日本遺産「信長公のおもてなし」が息づく戦国城下町・岐阜

平成27（2015）年4月24日“「信長公のおもてなし」が息づく戦国城下町・岐阜”が日本遺産に認定されました。日本遺産とは、文化庁が地域の歴史的魅力や特色、文化を語るストーリーを認定し、活用する取り組みを支援する制度です。さらに、令和7（2025）年2月4日には、文化庁からこれまでの優れた取組実績と今後の事業計画が高く評価され、他地域のモデルとなる「重点支援地域」に認定されました。

信長流

おもてなし三つのSHINZUI!

戦国時代、ここを拠点に天下統一を目指した、織田信長公は、戦いを進める一方、城の山麓に「地上の楽園」と称される宮殿を建設。さらに軍事施設である城を「魅せる」という独創性を加え、岐阜の城下一帯を最高のおもてなし空間としてまとめあげました。

現在の岐阜のまちに受け継がれている信長公のおもてなし、その真髄をご紹介します。



Surprise - 驚き -

岐阜城山麓に造られた迎賓館。それはまるで山水画の世界を原寸大で再現したかのようです。巨石を並べた通路や石垣、金箔瓦で飾られた建物、趣向を凝らした庭園群、次々と現れる豪華な部屋、そして信長公自ら食事の膳を運んでくる意外な演出！

訪れた人々は次々と現れる光景に、さぞ驚いたことでしょう。

岐阜城訪問

山上は最後の砦となる軍事施設ですが、信長公はそこにも客人を招き、城内のすべてを見学させました。宣教師ルイス・フロイスは柴田勝家の案内でここを訪れています。



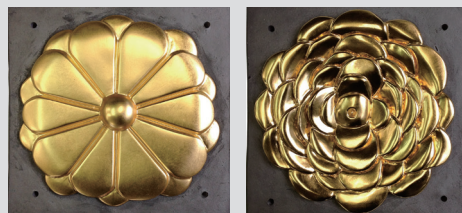
岐阜公園に残る巨石



国史跡 岐阜城跡



山麓宮殿イメージ図



宮殿に飾られた金箔瓦の復元品

Satisfaction -満足-

信長公は限られた人しか入れない特別な場所で、最高のおもてなしを繰り広げます。豪華な食材を遠方から取り寄せるのは当たり前、時には庭で飼っていた鳥さえもメインディッシュに提供しました。

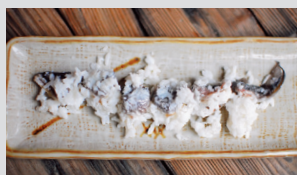
通常、家臣が行う食事の世話も、信長公自らが実施！細部まで行き届いたおもてなしに、どのお客様も大満足でした。

ぎふ長良川の鵜飼観覧

漆黒の闇の中で行われる光・熱・音・水・風的一大ページェント！信長公は武田信玄の家来を招くなど鵜飼を接待の場所として用い、「鵜匠」の名称を与えて保護したと伝えられています。



国重要無形文化財 長良川の鵜飼漁の技術



鵜匠家に伝わる鮎鮓



津田宗及をもてなした料理の復元



岐阜城と観覧船



船上の遊宴文化

Spectacle -壮観-

金華山や長良川の美しい自然と景観。ここは、中世から和歌に詠まれる景勝地でもありました。現在のまちの骨格は信長公の義父・斎藤道三公の時代までさかのぼります。

見どころ満載の岐阜の町ですが、中でも濃尾平野を一望する山上からの大パノラマは、信長公自慢の風景！ここに招かれた京都の公家・山科言継は、その素晴らしい眺めに言葉を失いました。



鵜飼観覧船のりばの風景



御鯰街道のまちなみ



国重要文化的景観 長良川中流域における岐阜の文化的景観

楽市楽座や長良川の水運で栄えた信長公の城下町では、上流から運ばれた美濃和紙や竹を使った文化が育まれました。その文化は提灯・団扇・和傘、そして岐阜大仏を生み出し、まちに更なる賑わいをもたらしたのです。

おもてなしの心

岐阜市では、市に訪れる観光客にボランティアでガイドを行う「岐阜市まちなか案内人」や、岐阜市のPR活動を行う「岐阜市観光宣伝隊」などが「おもてなしの心」をもって観光客を迎える活動を行っている。

■岐阜市まちなか案内人

岐阜市まちなか博士認定試験の合格者有志でつくるボランティアガイド。

観光客に対し、主要観光スポットである岐阜公園周辺を中心に、岐阜市の歴史や文化、観光地などをわかりやすくガイドしている。

■岐阜市観光宣伝隊

平成30（2018）年、岐阜市の豊かな自然と歴史に育まれた魅力ある観光資源を広く国内外にPRし、観光の振興及びイメージアップを図ることを目的として組織され、現在（令和8年8月現在）は下記の個人・団体が任命されている。

- ・やながせゆっこ ・ひあゆ丸 ・のぶさま。
- ・ボランティア団体 岐阜城盛り上げ隊
- ・岐阜信長公おもてなし武将隊 響縁きようえん
- ・濃姫のうひめ ・蜂蜜★皇帝はちみつ エンペラー ・信長おじさん
- ・「岐阜城応援特使」 田村 淳
- ・あゆお



ボランティアガイド 案内風景



岐阜市観光宣伝隊 PR風景

2 岐阜市の歴史を彩る人々

岐阜市には、戦国武将の織田信長や斎藤道三をはじめ日本の歴史にその名を残した人物や、芸術や学術などの文化面で多大な業績を残した人物が数多くいる。ここでは、岐阜市に関わりの深い偉人を紹介する。



織田信長肖像画



斎藤道三肖像画

戦国時代編

◎織田信長 おだのぶなが 〈P24参照〉

◎斎藤道三 さいとうどうさん 〈P27参照〉

◎織田信忠 おだのぶただ

天正4（1576）年、天下統一をすすめるため、信長が安土城へと移った。その前年、岐阜城を継ぎ城主となったのが信長の長男・信忠。天正10（1582）年3月、信忠は武田勝頼を倒すため信濃の伊奈口を攻略、さらに甲斐を平定した。そしてこの年、信長に反する一大勢力であった中国地方の毛利氏を討つため、岐阜をたち京の妙覚寺に宿泊した。その時、明智光秀もまた、中国攻めの加勢に派遣されたが、6月2日の未明、光秀は信長に背き、本能寺の変が起きた。信忠は父・信長に合流しようとするがそれができず、二条城にたてこもった。しかし、光秀の本隊の激しい攻撃を受けてついに二条城は炎上、信忠は自害。遺命で、家臣の前田玄以に岐阜城の織田秀信を守るよう言い残した。必死の思いで二条城を脱出した玄以は、秀信を守って清洲へと逃れた。

◎織田秀信 おだひでのぶ

織田秀信は、織田信忠の長男で幼名は三法師^{さんぼうし}。文禄元（1592）年、豊臣秀吉の後ろ楯^{だて}もあり岐阜城主となり、美濃国13万3千石を領することとなった。秀吉の死後、豊臣家家臣・石田三成と実力者・徳川家康との対立が激しくなり、日本中の戦国大名たちを二分する関ヶ原の戦いに発展する。その時、秀信は三成の誘いで、西軍について戦うことになった。慶長5（1600）年8月、関ヶ原をめざし清洲に集結した東軍の部隊は、江戸にいた家康の西上をうながすため、西軍の拠点であった岐阜城を攻略し、合戦の口火^{いけだて}を切ろうとした。西軍の秀信は木曾川中流（新加納村～米野村）に布陣し、岐阜城攻略をめざす池田輝政らの軍と戦ったが敗北。優勢であった東軍はさらに進撃を進め、秀信は金華山頂の岐阜城に追いつめられ、激しい攻防のすえ、福島正則や輝政らの軍にとらえられた。山頂から上加納^{じょうせんぼう}の浄泉坊（現円徳寺）に移された秀信は、そこで剃髪させられ、紀州の高野山へ追放され、慶長10（1605）年頃に病死した。また、この時落城した岐阜城も廃城という運命をたどった。

◎^{さいとうよしとつ}斎藤義龍

隠居した斎藤道三に代わって家督をゆずられたのが斎藤義龍。しかし、義龍の出生にまつわる疑惑もあり、領主になったにもかかわらず、道三からは我が子とは思われなかった。「長良川の戦い」で父・道三に勝利した義龍は、「権力を強奪した成り上がりもの」ではなく、正統な領主として認めてもらうことを望み、室町幕府の要人に働きかけて、美濃国主の地位を公認させる。そして、相つぐ戦いで弱体化した国内を引き締めるための政治改革を行った。その一つが6人の重臣の話し合いで政策決定や統治を行っていく「奉行人制度」の発足だった。また一方で、京都から僧を招き、禅宗の国内統一をはかるという宗教統制にも着手した。しかし、美濃における禅宗の中心寺院であった瑞龍寺ずいりやうじの権威をおとしめるものとして、快川紹喜かいせんじやうきらの反発を招き、思い通りに進まず、苦しみのうちに永禄4（1561）年5月に急死した。

◎^{さいとうたつおき}斎藤龍興

永禄4（1561）年、父・義龍の死により14歳で家督を継ぐ。その若さゆえ、君主龍興のもと、重臣たちの合議制によって政策を進めることになる。難題は、美濃に攻め入る信長に対処することであった。

永禄8（1565）年、快川紹喜の仲介により、甲斐の武田信玄と同盟関係を樹立した。しかし後に、信長の中濃攻略戦により、龍興は東濃の支配を放棄せざるをえなくなった。そして永禄10（1567）年、西美濃三人衆いなばよしみち うじいえなおもと あんどうもりなりの稲葉良通や氏家直元、安藤守就らが信長に内応したため、遂に稲葉山城を信長によって落とされた。龍興は降伏し、木曾川を舟で下り伊勢長島へと退散した。

その後も龍興は、三好三人衆と組み信長の入洛阻止を図るなど、反抗活動が続けたが、天正元（1573）年、越前の刀根山とねやまにて討ち死にした。

◎^{おくだいらのぶまさ}奥平信昌

奥平信昌は、三河国出身の戦略に優れた武将。天正3（1575）年、武田勝頼の約2万の大軍に囲まれながら約500人の兵で長篠城を守り抜き、戦いを勝利に導くという武功が認められて、徳川家康の長女・亀姫を妻にした。その後も数多くの戦功を上げ、関ヶ原の戦いの後には、初代の京都所司代に任命される。そして、慶長6（1601）年3月、家康の命令により加納藩主となった。信昌は城主をわずか1年で子の忠政にゆずって隠居したが、忠政が病弱であったため後見をつとめた。しかし、忠政はまもなく死去したため、その遺児の忠隆が慶長19（1614）年、7歳で城主を継いだ。悲運はさらに続き、初代城主であった信昌も元和元（1615）年、61歳で病死した。

◎^{かめひめ}亀姫

奥平信昌の妻であった亀姫は、徳川家康の長女であり、2代将軍・徳川秀忠せいとくいんの姉にあたる。「加納姫」または「加納大夫人」といわれ、夫の信昌に先立たれたあとは盛徳院を名乗って年少の奥平忠隆の治世を助けた。その後、亀姫は寛永2（1625）年、66歳で永眠する。また、奥平忠隆もわずか25歳で病死し、奥平家は断絶することになった。結局、奥平氏は3代にわたって31年間加納藩主をつとめたが、子孫が病弱であったためついに途絶えることとなる。亀姫が建立した加納の光国寺には亀姫の塚があり、盛徳寺には、亀姫と夫の奥平信昌が葬られた円墳式の墓が仲良く2つ並んでいる。ちなみに、この寺はもともと増瑞寺と呼ばれていたが、亀姫の院号であった「盛徳院」から盛徳寺と名を改めたとされている。

◎大久保石見守長安^{おおく ほ いわみのかみながやす}

大久保長安は、武田信玄の家臣だったが、行政や農政、交通の整備や鉱山開発などに才能を発揮したため、家康に認められ、幕府直轄領の代官頭に抜てきされる。美濃国奉行として岐阜へきたのは慶長6（1601）年のこと。岐阜の^{うつぼや}鞆屋町に陣屋を置き、徳川氏の直轄領の管理をはじめ、美濃国の経営にその手腕をふるった。慶長14（1609）年には幕府の領地や石高をつかむために美濃国検地を実施した。石見守長安によって行われた検地ということで、「石見検地」とも呼ばれる。その時代は、良質な木材資源や美濃紙の産地、そして金山や水運の湊などの重要地は幕府の直轄^{おおく ほ ただちか}領にされた。慶長18（1613）年に長安が死去し、その後、家康の重臣で上司であった大久保忠隣と本多正信の幕府内部の争いがからみ、長安が不正に財産をため込んだとして領地は没収され、長安の子も自害させられた。

◎快川紹喜^{かいせんじょう き}

長良の^{そうふくじ}崇福寺で修行した名僧。快川の名は、「川の流れが海に注ぐように禅宗をよく学び、吸収した」ということから名づけられたもので、その秀才ぶりをうかがわせる。斎藤義龍が行った禅宗の宗教統制には猛反発し、一步も引かず抵抗した。その時、快川らは尾張犬山の^{すいせんじ}瑞泉寺に移り、京都の本山・妙心寺を^{だて}後ろ楯にして争ったが、義龍の急死によって事態はおさまる。後年、武田信玄に招かれ甲斐の^{えりんじ}恵林寺の住職となったが、信玄の子・勝頼勢の落人をかくまったとして、天正10（1582）年に山門で^{かじょう}火定（自ら炎の中で死ぬ）した。その時、「安禅必ずしも山水を^{もち}須いず、心頭を滅却すれば、火もまた涼し」と発し、取り乱さず平然と焼死したと伝えられる。

◎加藤貞泰^{か どうさだやす}

加藤貞泰は、天正8（1580）年に加藤光泰の嫡男として生まれる。文禄3（1594）年、15歳で家督を相続し、美濃国黒野4万石に封じられ黒野城を築いた。慶長5（1600）年の関ヶ原の戦いでは、徳川家康の先陣として働き、本領を^{あん}安堵された。城下町を整えると共に、治水事業（^{じょうどの}尉殿堤）を行い、慶長15（1610）年に2万石を加増されたが、^{ほうきのくによなご}伯耆国米子（鳥取県）6万石に封じられたため、黒野城は、わずか16年の短期間で終わる。その後、元和3（1617）年、大坂の陣の功績により伊予国大洲（^{いよのくにおおず}愛媛県）6万石へ封じられた。元和9（1623）年、江戸において44歳で死去した。大洲藩の加藤家は、明治維新まで250年続いた。

なお、生誕地については、近江国磯野村（現在の滋賀県）が定説となっていたが、高野山（和歌山）の加藤家墓所にある^{ごりんとう}五輪塔において、生誕地が美濃国橋詰（現在の岐阜市端詰町）とする史料が発見された。

◎悟溪宗頓

悟溪宗頓は、尾張国(愛知県)山名村に生まれ、いまの犬山市にある瑞泉寺で、日峰宗舜^{にっぽうそうしゅん}に教えを受けた。やがて、日峰が妙心寺の4世になると、ともに上京。しかし、日峰が亡くなると美濃に行き、現在の関市武芸川町の汾陽寺^{ふんやうし}で学ぶ。その後、応仁の乱で焼失した京都妙心寺を再興した雪江宗深^{せつこうそうしん}につき門下生になり、再び瑞泉寺に帰る。応仁元(1467)年、現在の各務原市にある大安寺に斎藤利永の墓参りをした際、その弟の斎藤妙椿を訪ね、「ここを訪れる途中の稲葉山のふもと(厚見村)に天台宗の廃寺がある。そこをぜひ禅の修行地としたい」と申し出た。妙椿は尊敬する和尚の願いを聞き入れ、主家の美濃守護・土岐成頼^{しげより}の菩提寺としてここに瑞龍寺を建て、宗頓を開山として迎えた。文明2(1470)年、宗頓は再び京にのぼり、大徳寺の第52世、文明16(1484)年には妙心寺の第11世となる。そして、その地位を退いたあと妙心寺の中に、東海庵を設けて住んだ。明応9(1500)年、瑞龍寺で亡くなるが、この間、瑞龍寺を軸とする臨済宗の教えが広まり、大きな勢力となった。この流派は東海庵にちなんで「東海派」と呼ばれている。

◎斎藤妙椿

美濃国の守護代として斎藤氏の地盤を固めたのは斎藤利永であった。守護代の後継者となったのが弟の斎藤妙椿^{や おつちう}。50歳までは八百津町にある善恵寺^{ぜんねじ}で僧侶をしており、兄の利永が死んだ後も、僧のままで美濃国の統治にあたり、守護代としてふるまっていた。応仁の乱がおきると、守護の土岐成頼が京都で戦っている間に軍事力を強化し、隣国の近江や尾張などに攻め入ったり、莊園を奪ったりして富を蓄えながら、美濃を中心とした近江・尾張・伊勢・越前にまたがる広大な地域を支配した。その勇猛ぶりは妙椿の死亡したときに、「応仁の乱の間、妙椿は世の中をさんざんかきまわしたが、これで静かになるだろう」とまでいわれた。他方で、妙椿は和歌や連歌に優れ、乱を逃れた公家や僧侶らの文化人を保護するといった、文人としての側面もあった。文明12(1480)年、70歳で死去した。

◎土岐成頼

美濃守護の8代目にあたる人物。出身は土岐氏の直系ではないにもかかわらず、7代守護・土岐持益^{きもちます}の孫・亀寿丸を推す土岐氏の重臣たちをおさえて守護となった。その背景には、守護代として実力を蓄えた斎藤利永の強力な後押しがあった。その後、応仁元(1467)年に応仁の乱がおきると、成頼は軍を率いて京都に上り、山名方の西軍に属して11年間もの長い間戦いつづけた。その留守の間、美濃国では斎藤利永の後継者の守護代斎藤妙椿が強力な軍事力と富を得て、「応仁の乱の行方を左右する」といわれるほどの一大勢力を築きあげた。そのため、成頼は終生、強力な斎藤一族に支えられ、明応6(1497)年に死去した。その墓は、妙椿が成頼の菩提所として建立した瑞龍寺にある。

あんらくあんさくでん
◎安楽庵策伝

落語の祖と呼ばれる安楽庵策伝は、天文23（1554）年に現在の岐阜市山県に生まれ、岐阜市三輪の浄音寺で出家。その後京に上って修行し、西国にて布教活動にいそしむ。いくつかのお寺を建立・復興した後、再び岐阜に戻り浄音寺の第25世住職を17年間務める。一時は、岐阜市西荘にある立政寺の住職を務める。慶長18（1613）年、京都新京極・大本山誓願寺の第55世法主となった。策伝は岐阜出身の古田織部と同世代をきた人で、策伝の茶の師匠は織部といわれている。また、小堀遠州とは同じように椿を愛するということで交流があり、「百椿集」を書き残した。策伝は元和元（1615）年頃から説話集「醒睡笑」の執筆にかかる。8年の歳月を経て執筆された「醒睡笑」は、8巻1000余話におよび、落語の種本ともなった。策伝は字の読めない人たちにもわかるように、最後に「話の落ち」を用い、仏の道をおもしろおかしく語ったことから「落語の祖」といわれるようになった。寛永19（1642）年に89歳で死去した。

 近代・現代編

かとうえいぞう
◎加藤栄三

明治39（1906）年、現在の岐阜市美殿町で梅太郎・ため夫妻の三男として生まれる。17歳の時、岐阜商業学校を卒業。20歳で東京美術学校日本画科に入学。そして昭和4（1929）年、23歳の時に、第10回帝展で「夏日小景」が初入選。昭和6（1931）年、東京美術学校日本画科を卒業後も順調に才能を開花させ、新文展に出品した「薄暮」で第1回文部大臣賞、第3回新文展では「月夜」が特選を受賞した。しかし昭和20（1945）年の岐阜空襲で作品の多くを焼失するという不幸にみまわれた。戦後、昭和27（1952）年、第8回日展で初めて審査員となり、昭和31（1956）年、第12回日展に出品した「篝火」を期に、長良川の鶺鴒を本格的に取材し、数多くの作品を描くようになった。その後、第1回新日展出品作「空」で日本芸術院賞受賞、昭和44（1969）年には日展理事となった。昭和47（1972）年5月24日に死去した。

かとうとういち
◎加藤東一

加藤栄三の弟であり、大正5（1916）年に梅太郎・ため夫妻の五男として生まれた。昭和9（1934）年、岐阜中学校を卒業、昭和16（1941）年、東京美術学校日本画科に入学し、昭和22（1947）年に卒業。東一の画風は、清廉潔白で自由闊達、そして重厚にして誠実な彼の性格を反映しており、昭和22（1947）年の日展初入選以降、連続入選を繰り返し、昭和27（1952）年と昭和30（1955）年には特選受賞、昭和45（1970）年には内閣総理大臣賞、昭和52（1977）年には日本芸術院賞を受賞するなど数々の栄誉に輝いた。また、その作画態度も多くの画家の模範となり、全国的に高い評価を受け信望を集めていた。昭和59（1984）年の芸術院会員、昭和62（1987）年の日展事務局局長、平成元（1989）年の日展理事長など要職を歴任し、名実ともに日本画壇のリーダーとして尽力した。「岐阜県水墨画協会」の名誉会長として地域文化の振興や後進の育成に努めた。そして日展顧問、平成7（1995）年には文化功労者として顕彰を受け、翌平成8（1996）年には、岐阜市名誉市民となった。同年12月31日に死去した。

◎川合玉堂

四季の多彩な情景と人々の生活を描き続けた近代日本画壇の巨匠。明治6（1873）年、愛知県に生まれ、8歳の時、現在の岐阜市米屋町に移る。岐阜尋常高等小学校（現・岐阜小学校）を卒業し、京都に行き、望月玉泉などの門下生として日本画を学ぶ。明治29（1896）年に上京し、橋本雅邦の門下に入り、狩野派を学ぶ。こうして、伝統の技法と写実性を融合した、穏やかで安らぎに満ちた玉堂の世界は形成された。その後、大正4（1915）年、東京美術学校教授に就任。大正8（1919）年、帝国美術院会員になる。昭和15（1940）年には文化勲章を受賞。昭和26（1951）年には文化功労賞など、輝かしい経歴を重ねてきた。そして昭和32（1957）年、晩年に住居を構えた奥多摩で亡くなった。この時、正三位に叙せられ、勲一等旭日大綬章が追贈されている。岐阜県美術館には、郷土とかかわりの深い作家として玉堂の作品が収蔵、展示されている。

◎川崎小虎

明治19（1886）年、現在の岐阜市御園町で生まれる。本名は中野隆一。9歳の時上京し、大和絵の画家であった祖父の川崎千虎に大和絵の手ほどきを受け、その後、小堀鞆音、安田靉彦に学ぶ。明治43（1910）年に東京美術学校を卒業すると、小・中学校の図画教師を3年ほど勤める。明治45（1912）年、新しい日本画の研究会「行樹社」を結成し、さまざまな絵画技法を身につけていく。やがて幻想的でロマンチックな独特の大和絵の作風を生み出し、大正3（1914）年には文展に初入選した。昭和18（1943）年に、東京美術学校教授に就任、昭和36（1961）年に日本芸術院恩賜賞を受賞。大和絵のみやびやかな世界に洋画の技法を取り入れて、新しい日本画の可能性を拓いた小虎は、昭和52（1977）年に東京で亡くなる。代表作は「伝説中将姫」「小梨の花」などがある。

◎小島信夫

大正4（1915）年、岐阜市で生まれる。昭和29（1954）年「アメリカン・スクール」で芥川賞を受賞し、第三の新人の一人として注目を集めた。白山小学校を経て旧制岐阜中学校（現・岐阜高等学校）を卒業。旧制第一高等学校に入学して、福永武彦や中村真一郎らと知りあう。東京帝国大学文学部英文科を卒業後、一兵卒として中国の東北地方で軍隊経験した。復員してからは一時岐阜市内に在住したが、小説活動に意欲を燃やし再び上京、高校教師や明治大学教授を勤めるかわら積極的に作家活動をした。芥川賞受賞後は、弱者の心理や劣等生の悲しみなどをユーモアと皮肉をきかせた文体で発表し、独自の小島文学を確立した。ロックフェラー財団の招きで渡米した後に発表した「抱擁家族」は、昭和40（1965）年の第1回谷崎潤一郎賞を受賞。評論家・江藤淳からも絶賛された傑作だった。その後、日本文学大賞、日本芸術院賞など、次々と文壇、文化界の大きな賞に輝いた。そして、平成6（1994）年には、文化功労者として小説部門において顕彰され、文壇の頂点に立つ。平成18（2006）年10月26日に死去した。

◎^{な わ や す し}名和靖

ギフチョウの発見者として知られる昆虫研究家。安政4（1857）年、本巣郡船木村（現在の瑞穂市）で生まれる。岐阜県農学校を卒業後、東京帝国大学で研修を積んだ。師範学校などで教えるかたわら、昆虫採集と研究に打ち込むようになっていく。明治16（1883）年に^{かなやまちょう}金山町（現在の下呂市）祖師野付近で、見かけたことのないチョウの姿を発見。それが新種と認められ「ギフチョウ」と命名し、発表した。明治29（1896）年には、岐阜市京町に名和昆虫研究所を設立し、害虫駆除の研究など農業生産の向上に役立つ、実践的な研究や知識の普及に尽力した。そして、「昆虫世界」という機関誌の発行や害虫駆除の指導員を養成する講習会などを開いた。明治30（1897）年に出版した「昆虫世界^{はら}薔薇^{ひとかぶ}の一株」は、昆虫の生態をとおして人々の注意を促し、生態系学習の先駆としての価値をもつ。研究所は現在岐阜公園内に移転し、名和昆虫博物館として「ギフチョウ」をはじめ30万点以上の標本を所蔵している。大正15（1926）年に死去した。

◎^{はらさんけい}原三溪

本名を原富太郎といい、慶応4（1868）年、厚見郡佐波村（現在の岐阜市柳津町）の青木家に生まれる。東京専門学校（現早稲田大学）を卒業後、当時横浜一の生糸売込商であった「原商店」の婿養子^{むこやうし}となる。32歳の若さで家業を継いだ三溪は生糸供給の安定を図り、三井家から富岡製糸場ほかを譲り受け、生糸の製造から輸出までの一貫体制を整備し「世界の原」と呼ばれるまでに発展させた。また、大正3（1914）年の生糸価格の大暴落や、大正9（1920）年の^{さんし}蚕糸業者の破たんを引き金にした金融危機の収束にも全力を挙げ、七十四銀行の預金者保護のため、横浜興信銀行（横浜銀行の前身）を誕生させ、初代頭取に就任した。三溪の最大の偉業は、大正12（1923）年に起きた関東大震災の際に私財を投じて復興事業に力を注ぎ「横浜市復興会」会長にも推挙され、横浜市の再建に多大な貢献をしたことで「横浜の大恩人」として称えられた。一方、明治期の西洋文化偏重の流れの中、日本文化の危機を憂い古書画の収集や古建築の移築を始め、明治39（1906）年に「三溪園」を開園し市民に無料で開放したことでも知られる。

◎^{はな こ}花子

本名を太田ひさといい、明治元（1868）年に現在の愛知県一宮市で生まれる。養家先の没落により旅芸人となり、各地を転々とする。明治35（1902）年、デンマークのコペンハーゲン博覧会の踊り子としてヨーロッパに渡り、大成功を収める。また、日本人として唯一、近代彫刻の巨匠オーギュスト・ロダンのモデルとなった。大正10（1921）年に帰国後は岐阜市西園町で暮らし、静かな余生を過ごした。昭和20（1945）年に死去した。

◎平光善久

大正13（1924）年、北長森村北一色（現在の岐阜市北一色）で生まれる。本名は平光善久^{よしひさ}。昭和14（1939）年、国有鉄道に勤務するかたわら、早稲田中学講義録で独学をはじめ。昭和20（1945）年、終戦直前の中国で戦闘機からの機関砲撃を受けて左足を切断する。この鮮烈な戦争体験を綴ったのが第一詩集「案山子の歌」^{かかし}で昭和24（1949）年に刊行された。印刷会社を経営するかたわら、同人誌の発行などの文学活動が続け昭和27（1952）年には第二詩集「伽羅雲」を刊行。これによって翌年に第2回中部詩人努力賞を受ける。その一方で、昭和24（1949）年、岐南工業高等学校の校歌を作詞したことをきっかけとして、岐阜県内各地の小・中学校の校歌や社歌・町歌などの作詞も数多く手がけた。平成11（1999）年6月、岐阜市より「現代詩で岐阜の文化振興に貢献。現代詩に限らず、小説、児童文学などの著作活動を展開し、30数校の校歌の作詞もしている」という地域文化への貢献が認められ「岐阜市ふるさと文化賞」を受賞。この年の11月19日に75歳で死去した。

◎森田草平

岐阜市出身の文学者。森田草平は明治14（1881）年、岐阜県方県郡鷺山村（現在の岐阜市鷺山）^{かたがたくんさぎやまむら}で生まれる。東京帝国大学英文科を卒業後、夏目漱石^{しじ}に師事し、漱石門の四天王に数えられた。明治41（1908）年、平塚らいてうとの恋愛事件が話題になり、社会的な非難を浴びたが、翌年この事件をもとにした「煤煙」^{ばいえん}を朝日新聞に連載し、一躍人気作家となった。その後、しだいに翻訳の分野に精力を傾けていく。イプセン、ドストエフスキー、ゴーゴリなどの海外文学は、森田草平によって訳され日本に紹介された。大正12（1923）年、再び創作の世界へもどり、大正14（1925）年には自伝的な長篇「輪廻」^{りんね}を完成させ、さらに、歴史小説に新しい境地を拓いていく。昭和24（1949）年12月14日、「夏目漱石の永遠の弟子」という意識を持ち続けた生涯を終える。岐阜市鷺山にある森田草平出生地の屋敷跡には、その業績をたたえた文学碑が建てられている。

◎山田貢

明治45（1912）年、岐阜市で生まれ、14歳で故郷を離れ、友禅作家中村勝馬^{なかむらかつ ま}に師事し、以来70年友禅一筋に活動した工芸作家。昭和58（1983）年には、勲四等瑞宝章、昭和59（1984）年には重要無形文化財「友禅」保持者（人間国宝）になる。「友禅」の代表者といわれ、江戸期の模様を現代風に解釈し、網や麦、水などを題材にした清新な色調から生まれる現代的で優雅な味わいは、独自の世界が表現されている。長良川に代表されるふるさと岐阜のイメージを取り入れた作品も多く創られている。また、後世に残すべき美術工芸品として国が選定した買い上げ作品「朝風・夕風」は、東京国立近代美術館に保存されている。そのほか、山田貢の作品は、文化庁、東京芸術大学などにも収蔵されている。平成14（2002）年、東京で死去した。

3 岐阜市のおもな史跡

岐阜市には遠い昔から人が住みつき、この地を開き、耕し、賑わいをつくりだしてきた歴史がある。数多く残る史跡からは、連綿と息づく歴史や、そこに生きた人々の生活など、時代の息吹を感じることができる。



岐阜城跡



ずいりゅうじ さんちやう い せき 瑞龍寺山頂遺跡

昭和41（1966）年に梅林中学校の生徒が弥生時代後期の土器とともに、中国後漢時代（西暦25～220）年の青銅鏡である内行花文鏡を発見した。

昭和52（1977）年に市史編纂に伴う市教育委員会の発掘調査により岩盤をくり抜いて造られた長方形の墓穴（棺を置いたと推定）が2基確認され、鏡はこの穴の中から発見されたことが判明した。

出土品（鏡、土器、玉類など）から、岐阜県内の墳丘墓では最古級のものであるとされている。瑞龍寺山頂から見下ろす平地にはいくつもの弥生時代の集落跡が確認されており、鏡が発見されたことと中国鏡を打ち砕いて埋める儀礼などから、弥生時代後期にこの地方を支配した王の墓とされている。



岐阜市教育委員会提供



ことづか こ ふん 琴塚古墳

5世紀に造られたものと推定される前方後円墳。岐阜県内で第3位の規模で、墳丘の長さ115m、前方部の幅72.5m、後円部の幅68m、高さは10mで、面積は27,885m²にもおよぶ。周囲には内濠と外濠の二重の濠がめぐらされていた。一説には景行天皇のお妃であった美濃国の人・五十琴姫の墓とも伝えられ、岐阜県を代表する古墳として知られている。



あつみ であと 厚見寺跡

飛鳥時代、大和朝廷は近畿地方を中心に法隆寺や飛鳥寺などの寺院をさかんに造営した。そして、仏教が地方へ広まるとともに、美濃や飛騨にも寺院が造られるようになった。さらに壬申の乱の後には、地方の豪族が大和朝廷との結びつきを誇るかのように「氏寺」が各地に造られるようになってきた。瑞龍寺にある厚見寺跡も氏寺の一つとされている。出土した瓦が、飛鳥の官寺であった川原寺の系統のものであったことからそう推定されている。岐阜市にはこの他に、鍵屋廃寺、大宝廃寺などが氏寺であったといわれている。

おいぼら あさくら す え き かまあと 老洞・朝倉須恵器窯跡

昭和52（1977）年11月、「美濃」や「美濃国」の刻印がある須恵器が岐阜市老洞の山林から発見された。この発見を受けて、翌年8月から岐阜市教育委員会が老洞古窯群の本格的発掘調査を行い、奈良時代前半に須恵器を生産した窯跡であることがわかった。3基からなる窯跡群からは7万点におよぶ出土品が発見され、そのうち美濃国の刻印がある須恵器は約1,300点あり、押印に使った陶製の印そのものも出土している。



かわ て じょうあと 革手城跡

「土岐絶えなば足利絶ゆべし」といわれるほど、足利幕府から信頼があった美濃守護職・土岐氏の本拠地。土岐氏は、美濃はもとより尾張、伊勢の守護を兼ねた時代もあり、革手は周防の山口、関東の鎌倉と比べられるほどの繁栄をみせていた。9代土岐政房が福光館（現在の岐阜市長良）へ移ったことにより廃れた。

ぎ ふ じょうあと 岐阜城跡

平成23（2011）年2月7日、岐阜城を含む金華山一帯（209ヘクタール）が「岐阜城跡」として国史跡に指定された。国史跡とは日本の歴史を正しく理解するうえで欠くことができない遺跡のことで、岐阜市内の国史跡としては4件目となる。「岐阜城跡」は信長の居城の史跡指定としては最も範囲が大きく、日本の歴史・文化を考える上で重要な史跡として高く評価された。



か のう じょうあと 加納城跡

旧加納城は、文安2（1445）年に土岐氏の守護代であった斎藤利永が最初に築いた。

現在も長い石垣がそのまま残る加納城の城跡は、関ヶ原の戦いの後、徳川家康が本多忠勝を総奉行として、東山・北陸の諸大名に命じ、再建させた時のもの。この工事では岐阜城をはじめ、加納に近い旧革手城跡や正法寺跡から建物、礎石、石垣などを運んで築城した。岐阜城の天守は、加納城二の丸東北角の櫓に姿を変えた。



そして、慶長6（1601）年、城が完成する前に、家康の娘・亀姫をめとった奥平信昌が初代10万石の加納藩藩主となった。以後、奥平三代をはじめ、大久保、戸田（松平）、安藤、永井が藩主となった。しかし、享保13（1728）年の城中の火災で二の丸東北角の櫓は焼失し、そして明治4（1871）年の廃藩置県により加納城は廃城となった。

昭和58（1983）年10月28日に「加納城跡」として国史跡に指定され、現在は、本丸跡を中心に加納公園となっており、門跡や石垣などが残る。

くろのじょうあと 黒野城跡

文禄3（1594）年に加藤貞泰が築城した城。本丸跡はおよそ110m四方の方形で、土塁の高さ約5m、幅約15mの堀に囲まれている。土塁の北西と南東隅にはかつて櫓が設けられていた。入口付近には石垣の石材がみられるなど、昔の黒野城のなごりを見ることができる。また旧城下には外堀跡の一部や町屋敷の地割りが残されている。



慶長15（1610）年、貞泰が米子に転封となり廃城、その後加納藩領となる。黒野城の城主は一代かぎり、わずか16年の歳月であった。城跡は、現在は「黒野城跡公園」として親しまれている。

のりたけ わじゅうあと じょうどのつみあと 則武輪中跡・尉殿堤跡

長良川は、昭和14年の締切工事以前は、井川（現：長良川）、古川、古々川に分流していた。古川と古々川の分岐地点は、現況では周囲より3～6mほど高くなっており、天神社が建っている。ここは黒野城主加藤貞泰が、慶長13（1608）年に築いた堤防の西端である。この堤防は貞泰の官僚名「左衛門尉」から「尉殿堤」として伝承されてきた。また、この地点は、則武輪中堤防の起点であったと考えられる。則武輪中跡・尉殿堤跡は、岐阜市の輪中集落と治水の歴史を考える上で重要である。



し し あん 獅子庵

北野の大智寺のかたわらにある庵。美濃派俳諧の始祖・各務支考が美濃派の拠点とした庵で、その号にちなんで美濃派の名称を「獅子門」という。大智寺で修行した各務支考は蕉門十哲の一人で、松尾芭蕉の死後も全国を行脚し、師の俳風の普及に努めた。



ほうれき ち すいこう じ ぎ ぼつしゃのはか れいしょういん 宝暦治水工事義歿者墓（霊松院）

岩崎にある、宝暦治水工事で切腹した内藤十左衛門の墓。十左衛門は高木新兵衛の家臣で、宝暦治水工事の築堤工事の監督をしていた。しかし、工事を進めていたとき、堤防の上に置く土も、幅を広げるための積土も少ないことに気づき補修を命じたが、それもままたらぬまま築堤工事は終了した。その後、検査のときに工事が充分でなかったことを指摘され、その責任が主人に及ぶのを防ぐため、宝暦4（1754）年4月22日に自害した。



その他

ふな き やま こ ふんぐん 船来山古墳群

岐阜市と本巣市にまたがる船来山には古墳群が密集し、200基を超える古墳の発掘調査が行われた。その大部分が横穴式石室を主体とする6～7世紀の古墳で、4～5世紀の前・中期古墳なども発見されている。このことから、船来山は古い時代から神聖なる「墓域」とされていたことが分かり、山全体には1,000基以上の古墳があると推定されている。全国的にみて珍しい雁木玉やトンボ玉なども多数出土している。

4 岐阜市の寺院・神社めぐり

岐阜市には、由緒ある寺院・神社が数多くある。これらの寺院・神社には、名僧や文人、武将たちのゆかりの品など関わりを示すものや興味深い逸話などが残されている。これらをめぐって、岐阜市の歴史を学んでみるのも面白い。



岐阜大仏

しょうぼう じ 正法寺 [岐阜大仏]

江戸時代初期に中国から伝わった黄檗宗の寺院で、日本三大仏の一つと称される岐阜大仏が安置されている。

岐阜大仏は、度重なる地震や飢饉の犠牲者の冥福を祈るため、11代惟中和和尚が造立を図り、約40年の歳月を費やして天保3（1832）年に完成させた。

木材で骨格を組み、竹を編んで土壁下地で概形を作り、その上に和紙（一切経）を貼り、漆、金箔を施すという作り方でできていることから「籠大仏」とも呼ばれる。高さ13.63m、耳の長さ2.12m、鼻の高さ0.36mであり、塑像漆箔としては日本一の仏像である。

また、大仏の像内に建つ「真木」と呼ばれる太い柱は、大仏殿の小屋組を直接支えているため、大仏と大仏殿は構造的に一体とみることができ、他に類をみない独自性を持つ。



みえ じ 美江寺

天台宗の寺院で、岐阜市に移る前は瑞穂市の^{すなみ}巣南にあった（本尊は、伊賀の十一面観音を移したもの）。創建は養老元（717）年という古い歴史を誇り、後に斎藤道三が稲葉山城下の繁栄を願って現在の地に移したといわれている。平成24（2012）年まで、毎年3月の第1日曜日に美江寺まつり（別名「お蚕まつり」）が開催されていた。これは、1年間の降水量、農作物、^{ようさん}養蚕の吉凶を占うという珍しいものであった。



ずいりゅう じ 瑞龍寺

臨済宗妙心寺派の寺院。応仁年間（1467～1469年）に、守護代・^{さいとうみょうちん}斎藤妙椿が主君の美濃守護・^{と きしげより}土岐成頼の菩提所として建立し、^{ごけいそうとん}悟溪宗頓を迎えて開山した。宗頓は優れた門下生を多く育て、美濃をはじめとし、全国に禅の教えの素晴らしさを広めた。現在も妙心寺派の専門道場として雲水たちの修行所となっている。この寺院には妙椿の墓、成頼の墓、宗頓の墓、厚見寺跡などの史跡がある。

み た ぼらこうぼう ほっけ じ 三田洞弘法 [法華寺]

三田洞弘法として親しまれる法華寺は真言宗の寺院。弘仁7（816）年、弘法大師が全国行脚の途中に立ち寄り、創建したと伝えられている。その後、しばしば火災にあったが、寛永年間（1624～1643年）に中興し、貞享元（1684）年、則応和尚のとき現在の場所に移転した。江戸時代には高富藩本庄氏の祈願所でもあったこの寺院は、鏡島弘法、北方町の円鏡寺とともに美濃三弘法のひとつに数えられている。弘法大師お手植えの竹、菩提樹のほか、池や滝のある庭園が美しく、四季を通じて参拝客や観光客で賑わっている。後方の山中には、「ながら川ふれあいの森」があり東海自然歩道が通っている。また、同じく弘法大師が建立したと伝えられる延算寺とも、山伝いにつながっている。



えんさん じ 延算寺

弘法大師が弘仁6（815）年の美濃巡教のうちに、民の病苦を救うために建立したと伝えられる古寺。古くは七堂伽藍、十二支院のあった壮大な寺だったが、応仁の乱以後たびたびの兵火によって焼失し、江戸時代初期に復興した。小野小町も祈願したといわれる瘡神薬師、伝教大師作とされる本尊薬師如来立像、弘法大師手掘りの井戸など、興味深い逸話が残された文化財を数多く所蔵していることでも知られている。かさ神さまとして親しまれている。



ごこくし じ 護国之寺

聖武天皇の勅願により、天平18（746）年に開基したと伝えられる真言宗の寺院。永禄年間（1558～1569年）に一度焼失したが、天正18（1590）年に再建された。寺宝は国宝の「金銅獅子唐草文鉢」。聖武天皇がこの地の日野金丸という小童が優れた仏像画を描くことを聞いて、奈良に呼び大仏鑄造にあたらせ、その功績が認められ、天皇からこの仏鉢を賜ったとされる伝承がある。



じょうおん じ 浄音寺

岐阜市三輪にある、落語の祖・安楽庵策伝ゆかりの寺院。浄音寺は浄土宗西山禅林寺派の寺院で、寛喜元（1229）年に初代住職の浄音上人が創建・開山したと伝えられている。落語の原典ともされる「醒睡笑」を書いた策伝はこの寺で出家し、京都などで修行・布教活動の後に再び岐阜に戻り、浄音寺の第25世住職を慶長元（1596）年から17年間務めた。その後、京都の誓願寺の第55世住職となり、元和9（1623）年に「醒睡笑」を完成させる。平成14（2002）年1月には、この寺院で策伝を顕彰した奉納落語会も行われ、以後毎年1月に顕彰落語会を開催している。



しんちょう じ **真長寺**

岐阜市三輪にある高野山真言宗の寺院。平安時代に造られ三輪釈迦の名で親しまれている国指定重要文化財「木造釈迦如来坐像」や江戸初期に造られた名勝枯山水の庭園などを今に伝えている。秋には観月会やもみじ祭りが開催される。



みょうしょう じ **妙照寺**

岐阜市梶川町にあり、創建は天文3（1534）年で、本堂は寛文2（1662）年に建てられた。慶長5（1600）年、当時の岐阜城主の織田秀信から、竹中半兵衛（豊臣秀吉の家臣）の屋敷跡を寄進され、現在の位置に移った。貞享5（1688）年、当時この寺の僧で後に住職となる己百に招かれた松尾芭蕉は約1か月間に亘り滞在した。その座敷は現存し、芭蕉の挨拶句「やどりせむあかざの杖になる日まで」の句碑も境内にある。



だい ち じ **大智寺**

岐阜市北野にある臨済宗妙心寺派の寺院で、創建は明応9（1500）年とされている。境内には県指定天然記念物の大ヒノキがある。また、隣接して蕉門十哲の一人で美濃派俳諧の始祖・各務支考が、松尾芭蕉の俳諧精神を広める拠点とした「獅子庵」や芭蕉の句碑などがある。



すごう はちまんじんじゃ **菅生八幡神社**

応和2（962）年、国守美濃権守、多田満仲の造営とされる。岐阜市史（昭和3年）によると、天正19（1591）年8月10日に、江（織田信長の妹であるお市の方と、浅井長政との間に生まれた三姉妹の三女）の2番目の夫の豊臣秀勝（岐阜城主）が、神社に燈明代として社領を寄進したと記されており、秀勝と江ゆかりの社として神社の前に記念碑が建っている。



い な ば じん じゃ 伊奈波神社

けいこうてんのう

景行天皇14(84)年に創建されたといわれる歴史ある古社。4月の第1土曜日曜には岐阜まつりが行われ、宵宮では岐阜市内を練り歩いた山車や神輿が次々に集まってくる。斎藤道三が岐阜公園の丸山から現在の地に移転したと伝えられている。境内は壮大な楼門、拝殿、本殿などが建つ厳かな雰囲気だが、岐阜まつりの頃には参道の桜がちょうど見ごろとなる。また、元旦には午前零時を迎える前から長蛇の列ができるほどの初詣スポット。



こがね じん じゃ 金神社

せいむてんのう

成務天皇の時代(131～190年)といわれる由緒ある神社。境内裏手には小円墳が一基あるほか、付近一帯からは須恵器の破片などが大量に出土しており、古墳時代の後半に栄えた地区であると推測されている。現在は初詣スポットとして多くの参拝客が訪れるほか、境内には、花壇、ベンチなどが備えられ、繁華街にも近いことから日常的に市民の憩いの場となっている。平成27(2015)年には鳥居が金色に塗り替えられた。



て ぢから お じん じゃ 手力雄神社

あまてらすのおみかみ

天照大神が隠れた岩戸を外からこじあけた力持ちの神様として知られる天手力雄命が祭神。10世紀中頃に成立したとされる「美濃国神名帳」に記載があり、創建はそれ以前とされている。4月の第2土曜日に神社境内で行われる奇祭「手力の火祭」が広く知られ、祭り当日には多数の観光客が訪れる。



トピックス

三社まいり

伊奈波神社の主祭神「五十瓊敷入彦命」は、第11代「垂仁天皇」の長男である。金神社の主祭神「淳熈斗媛命」は、第12代「景行天皇」の皇女であり、「五十瓊敷入彦命」の妃である。檀森神社の主祭神「市隼雄命」は、2人の御子である。伊奈波・金・檀森の三社主祭神は親子関係にあり、三社を歩いて参ると家族の絆がうまれ、家族がそろって幸せになると言われている。

